

# リーディング DX スクール事業を通じた 「GIGA×深い学び」の具現化

—Google ツールの校内普及と個別最適な学び・協働的な学びの一体的な充実—

塩尻市立宗賀小学校 倉科 結衣

## 1. 研究の趣旨

今年度本校は、文部科学省が GIGA スクール構想を進めるためのプロジェクトである“リーディング DX スクール事業（以下 LDXS 事業）”の指定校<sup>1</sup>となった。同省は、本事業の目的を「全国すべての都道府県及び政令指定都市に指定校をおき、GIGA 端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を徹底的に活用し、情報活用能力の育成を図りつつ、『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実や校務 DX を推進し、全国に好事例を展開すること」と述べている。4月に行われたキックオフ会議では、同省寺島史朗課長や堀田龍也委員長より、デジタル基盤による『深い学び』の実現と教師の指導性が重点課題として示された（図1）。



図1：令和7年度リーディングDXスクール事業の概要

本校では、2年前より端末（iPad）を活用した授業研究に本格的に取り組んでいる。体育の器械運動では、手本の動画と自身の動画を見比べることにより改善点の発見に繋がった。また、授業の中でロイロノートの提出箱や共有ノートを積極的に活用し、他者の考えを参照できる環境も整備してきた。しかし、活用するアプリケーションがロイロノートに限られていること、端末を使って「学びを深める」段階へは到達していないこと、教員間における ICT 活用指導力の習熟度の差が、授業における活用頻度や手法の差異として顕在化していることが課題となっていた。

そこで本研究では、LDXS 事業の重点課題である「GIGA×深い学び」の実現に向け、クラウド環境の十全な活用による授業改善と校務 DX の二層構造で研究を進めることにした。授業実践では、第3学年における「他者参照」を軸とした道徳科の実践や、学び方を自ら選択する理科の実践を通じ、ICT が児童の主体的な学習意欲にいかに関与するかを明らかにする。あわせて、Google ツールの校内研修・校務 DX 化を通じて、教員の ICT 活用指導力の底上げを図っていく。本稿は、筆者が本校の LDXS 事業の推進役として、今年度取り組んだ授業実践および校内研修の成果を報告するものである。

## 2. 研究の仮説と手立て

### 2.1 研究の仮説

はじめに「主体的・対話的で深い学び」と「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の関係について整理する。文部科学省が運営するサポートマガジンサイト

<sup>1</sup> 令和7年度リーディングDXスクール事業では、同じ中学校区内の小・中学校各1校以上の組み合わせが原則となっている。よって、塩尻西部中学校・洗馬小学校も指定校となっている。併せて、檜川小中学校が協力校として認定されている。

『みるみる』(2025)では次のように述べられている(下線は筆者による)。

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じて資質・能力の育成を図っていく、ということが多様な特性を有する全ての子供において実現するということが出発点としてあり、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」はそのための具体的な改善の視点であることに留意していただきたいと思います。例えば、子供一人一人が個別に学ぶ場面や、協働する場面が準備されていたとしても、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」につながっていなければ、本末転倒になってしまいます。

本引用が示す通り、学習形態の整備そのものが目的化することを避け、あくまで「深い学び」への到達を主眼に置く必要がある。クラウド環境を基盤とした学習環境を整え、児童が学習内容や方法を「選択」したり、他者の考えを「共有」し、自身の考えを更新させたりする場면을意図的に設定すれば、端末を「思考の道具」として活用した「深い学び」が実現すると考えた。

また、本事業の目的に「GIGA端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を徹底的に活用」することが掲げられているため、本実践における授業実践や校務研修では Google Workspace を主要なツールとして活用する。

## 2. 2 研究の手立て

### 手立て① 校務DXと校内研修の連動によるICTリテラシーの向上

授業での活用を日常化させるためには、まず教員自身のICTリテラシーの向上が不可欠である。そこで、校内研修と校務で Google Workspace の活用を推進した。具体的には、職員会議資料や月行事予定の Google ドライブでの共有および共同編集の実施、校内連絡への Google Chat の導入など、クラウド上で情報を扱う利便性を実感できる環境を整えた。これにより、授業で活用する際の心理的・技術的ハードルを下げることをねらいとした。また、月ごとに目標や重点使用ツールを決定し、教職員間で共有することで、確実な推進の一助となるよう工夫した(図2)。

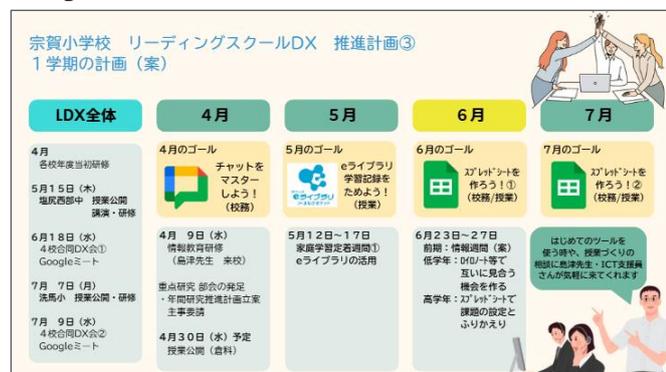


図2:校務DXに関わる1学期の推進計画資料

### 手立て② 「選択」と「他者参照」を軸とした授業づくり

個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるため、学習の主体を児童に委ねる授業構成を重視した。奈須・伏木編(2023)は「一人でやるのか他者とやるのかは、学習者である児童生徒が決めるということが大原則である。それが『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』という用語の意味である」と指摘している。この原則に基づき、各教科や単元において、児童が学習形態を自己選択できる機会を意図的に設定した。また、クラウドを通して他者の思考をいつでも参照できる環境を整備し、互いの考えにふれる時間を確保することで、自身の思考を深め価値観を更新させるきっかけとした。

## 3. 研究の実践

### 3.1 校内研修と校務DXの推進

#### (1) Google Chatによる校内連絡の円滑化

【意図】

- ・教職員が日常的にクラウド上での情報共有に慣れ、ICT 活用への心理的ハードルを下げるため。
- ・職員連絡会の時間を短縮し、他の教育活動や教材研究の時間を捻出するため。

#### 【内容】

- ・全職員が参加するスペース<sup>2</sup>に加え、研究部会、行事予定（月・週予定）などの用途別スペースも作成した。また、端末の不具合を市の担当者へ直接相談できる連携スペースも作成し、外部機関との迅速な情報共有体制を整備した。

#### 【実際の様子・成果】

年度当初に、校内連絡ツールは Google Chat に一本化することを周知した。導入に際しては、練習用のスペースを作成し短時間の操作研修を実施した。通常の投稿に加え、誰かの投稿に対するリアクション（絵文字）・スレッド返信・画像やファイルの添付といった基本操作を全体で確認した。研修で扱う内容は、教職員が気軽に話せるような日常的な話題を選び、親しみを持って活用してもらえるように配慮した（図3）。

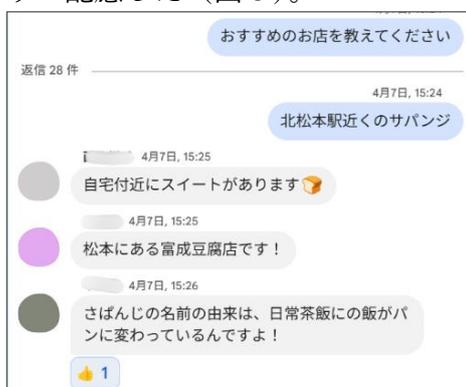


図3：チャット操作研修の様子



図4：校内での活用の様子

実践の結果、Chat による情報共有が定着し、職員室では「とりあえず Chat に入れておこう」という言葉も交わされるようになった。場所や時間に縛られず、必要な時に投稿・閲覧できる環境が整ったことで、毎週の職員連絡会の時間が短縮された。特定の教員に偏らず、多くの教職員が Chat を利用し校務や行事に関わる連絡を発信する姿が見られるようになった（図4）。

定着の要因として、校内だけでなく、LDXS 事業や日々の ICT に関わる市からの情報提供にも同ツールが使われていたことが挙げられる。校内・校外の枠組みを超えた「情報の共通基盤」として Google Chat が機能したことが、組織的な DX の加速に大きく寄与したと考えられる。

## (2) スプレッドシートの操作研修

#### 【意図】

- ・スプレッドシートの操作習熟を図り、授業での活用に繋げる。
- ・行事予定等の集約業務を「紙による個別回収」から「クラウド上での共同編集」へ移行し、管理職や教務主任の負担を軽減する。

#### 【内容】

- ・年度当初より、スプレッドシートの基本操作に慣れるための研修を段階的に実施した。
- ・これまで、紙配布していた週や月の行事予定をスプレッドシートへ移行。担当職員が各自の予定（行事、会議、出張等）を直接入力・更新できる体制にした。

<sup>2</sup> Google Chat の『スペース』とは目的に応じた掲示板型の共有グループのことである。

【実際の様子・成果】

5月には塩尻市の指導主事によるスプレッドシートの基本操作および、Google Chat と連携したシートの共有方法に関する研修を行った。6月には、実際の授業での活用を見据え、ウィンドウ枠の固定・プルダウン(ドロップダウンリスト)の作成・背景色の設定など、利便性を高める応用機能の研修を実施した(図5)。研修では操作に長けた教員が他の教職員をサポートする姿も見られ、校内で学び合いながらスキルを向上させていく雰囲気が根付き始めてきた。2学期以降は、週・月予定の加除修正を全てスプレッドシート上で行い、赤字での変更や補足コメントを加えるように徹底した(図6)。また、毎月の安全点検シートもスプレッドシートによるクラウド上の編集に置き換えることで、紙での配布や紛失による時間ロスが解消され、ペーパーレス化と教務事務の効率化を図ることができた。

図5：6月スプレッドシートの研修シート

図6：スプレッドシート上での加除修正(月予定)

このように、校務での日常的な利用を通じて、ICT 活用に対する心理的ハードルが低下した結果、スプレッドシートを授業のワークシートとして活用する学級が増加した。これは手立て①で掲げたように、校務での活用が授業活用へと波及していることを裏付ける結果となった。

3.2 授業実践

(1) 道徳科：実際の対話とスプレッドシートによる「他者参照」と価値の更新

①本時のねらいと活用ツール

【教材名】『考える』じゅんびたいそう(第3学年 光村図書)

【ねらい】他者との対話や考えの参照を通して、自分の考えを深める

【ツール】スプレッドシート

②ICT 活用の工夫

- ・スプレッドシートに「はじめの自分の考え」「友達と話して考えが変化したか」「更新した自分の考え」の3項目を作成し、個人の思考プロセスの変容を可視化できるよう工夫した(図7)。
- ・対話の時間に加え、スプレッドシートに書かれた友達の考えを読み取る時間

深く考える ゆんび	男の子が赤いランドセルを持ってはいけないの？		
名前	自分の考え	友だちと話して、考えがかわった？自分の考えが「やっぱり合ってる」って思った？	もう一回 自分の考えをくわしく書いてみよう
	白がよっぽどキレイ！	白がのんが白すぎる	白がキレイなランドセルがいいけど、それだけじゃダメなところがあるから、それだけでいいと思う。
	赤でもいいと思う。	自分の考えが合ってる	好きな色と嫌いな色があるから男の子も赤色のランドセルでもいいと思う
	男の子でも赤いランドセルをもっていると思う	自分の考えが合ってる	男の子でも赤がすきかもしれないから男の子でも赤いランドセルをもっていると思う
	男の子だって赤が好きなんだって、いるから男の子も赤いランドセルを持っていると思う。	考えがかわった	まあ男の子はできるだけ黒とか金が合うと思う。
	男の子でも赤色が好きな子もいるから。	考えがかわった	まあ男の子は青だとおもっていたけど、あかでも男の子もいるとおもったし、女の子も青や黒のランドセルでもいいとおもったし、性別がちがってもいいとおもいました。
	昔は性別で色が決まっていたけど今は性別関係ないです。好きな色の種類のランドセルを背負えばいいです。	両方	戦争が終わった後学校が作られて最初は男が黒、女が赤と決まっていたけど色の種類が増えてから性別関係なくそれぞれの好みの色のランドセルを背負っていいことになりました。それで男の子が赤

図7：本時活用したスプレッドシート(道徳シート)

を十分に確保し、他者の多様な考えにじっくり向き合える環境を整えた。

### ③授業の様子

「男の子は赤いランドセルを持ってはいけないの？」というテーマについて話し合った。主な学習過程は、①テーマ提示、②考えの記入、③近くの友達との対話、④シートによる他者参照、⑤変容の選択、⑥考えの再記入、⑦振り返り、である。

#### 【A児：固定観念の変容】

A児は導入当初、自分の考えを書くことができずにいたが、シート上の他者の記述を見ながら、「男の子でも赤色が好きな子もいるから」と書き出すことができた。その後の対話では、自分と同じ立場の友達と「別に（赤でも）いいよね」と話し合っていた。しかし、最後にもう一度自分の考えを書く場面では、考えが「かわった」と選択し「前までは男の子は青だと思っていたけど、赤でもいいと思ったし、女の子も青や黒のランドセルでもいいと思ったし性別がちがってもいい」と記述した（図

A	B	C	D	E
『深く』考える じゅんび	男の子が赤いランドセルを持ってはいけないの？			
	自分の考え	友だちと話して、 考えがかわった？自分の考えが 「やっぱり合ってる」って思った？	もう一回 自分の考えを くわしく書いてみよう	文字数
A児	男の子でも赤色が好きな子もいるから。	考えがかわった	まえまでは男の子は青だとおもっていたけどあかでも男の子もいいとおもったし女の子も青や黒のランドセルでもいいとおもったし性別がちがってもいいとおもいました。	77

図8：A児の記述（全体シートより抜粋）

8)。

当初、他者と異なる意見を書くことに躊躇していたと思われるA児だが、話し合いやシートを通じて他者の考えにふれることで、自身の価値観の変容を自覚し、性別や性に対する考え方を深めることができたと考えられる。

#### 【K児：クラウド上での対話】

K児も、当初は自分の考えを書くことができずにいたが、「持ちちゃいけないわけじゃないけど、6年生くらいで黒に替えたくなると思う」と記入した。実際の対話場面では自分から積極的に話しかけることができず、スプレッドシート上で友達の考えを読み進めていた。個別指導において、気になった意見があるか尋ねると、「S児の考え（男の子だって赤色が好きな人だっているから）が、とてもいいと思った」と回答した。K児はS児と直接対話をしたわけではないが、シート上で他者の考えにふれ、それを自身に取り込むことで価値観を更新させていた（図9）。

『深く』考える じゅんび	男の子が赤いランドセルを持ってはいけないの？			
名前	自分の考え	友だちと話して、 考えがかわった？自分の考えが 「やっぱり合ってる」って思った？	もう一回 自分の考えを くわしく書いてみよう	文字数
K児	持ちちゃいけないわけじゃないけど、6年生くらいで黒にかえたくなると思う。	考えがかわった	さんの「男の子だって赤色が好きな人だっているから」がとてもいいとおもった。	41

図9：K児の記述（全体シートより抜粋）

クラウド上での他者参照は、対面での交流が苦手な児童にとっても深い学びを支える有効な手立てとなり得ることが示唆された。

## (2) 理科：学習内容・形態の「自己選択」と主体的な観察

### ①本時のねらいと活用ツール

【教材名】「こん虫のからだを調べよう」（第3学年 信州教育出版社）

【ねらい】昆虫の体のつくりを観察し、頭・むね・はらの3つの部分からできていることを理解する

【ツール】スプレッドシート、NHK for School『ものすごい図鑑』、ロイロノート  
 ②ICT 活用の工夫

- ・座席表形式のスプレッドシートを作成し、「観察したい昆虫」と「学び方（一人で集中・先生と・友達と）」を児童自らが選択できるようにした。友達と一緒に学習をしたい時は、シート上の情報を参考に、同じ昆虫を選択した者同士で学び合えるよう促した（図 10）。

「ごん虫のからだを調べよう」						
黒板						
5 トノサマバッタ 友だちと	5 ハンミョウ 先生と	3 ハンミョウ 一人で集中	3 ハンミョウ 先生と	1 カブトムシ 先生と	1 ハンミョウ 友だちと	1
5 モンシロチョウ 一人で集中	5 オオカマキリ 友だちと	3 トノサマバッタ 友だちと	3 クマバチ 友だちと	1 クマバチ 先生と	1 クマバチ 友だちと	1 ノコギリクワガタ 友だちと
5 クマバチ 一人で集中	6 ハンミョウ 友だちと	3 モンシロチョウ 友だちと	3 オオカマキリ 友だちと	2 クマバチ 友だちと	2 クマバチ 友だちと	2 キリギリス 友だちと
6 トノサマバッタ 友だちと	6 オオカマキリ 先生と	4 クマバチ 友だちと	4 オオカマキリ 友だちと	4 ハンミョウ 友だちと	2 キリギリス 友だちと	2 キリギリス 友だちと
6 トノサマバッタ 一人で集中	6 ノコギリクワガタ 一人で集中	4 ハンミョウ 友だちと	4 モンシロチョウ 友だちと	4	2	調べる昆虫 漢字 漢字

図 10：本時活用したスプレッドシート（理科シート）

- ・NHK for school『ものすごい図鑑』を活用することで、児童が昆虫の動きに左右されず、様々な角度で細部までじっくりと観察することができるようにした（図 11）。

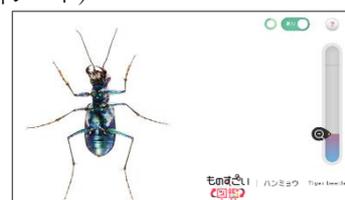


図 11：ものすごい図鑑での観察

③授業の様子

【事例①Y児：一人で集中】

Y児は調べたい昆虫に「クマバチ」、学び方に「一人で集中」を選択した。観察の時間になると、自ら座席を流し台の近くへ移動させ、自身が集中できる環境を構築した（図 12）。図鑑を用いてクマバチの体を観察し、気になるところは倍率や向きを変更しながら黙々とスケッチを続けた。設定した時間が終了しても「まだかきたい」と延長を希望し、最後までクマバチを覆う毛や手足の形にこだわりかき続けた。最後に、既習のアリヤトンボの体と比較し、足の付け根の位置に注目しながら、「頭・むね・はら」の3部分を正確に分けることができた（図 13）。



図 12：Y児の席

他教科でも「自分のペースで進めたい」という強い願いをもつY児にとって、学び方を自己決定できる環境は、主体的な学びを促進する有効な手立てとなった。

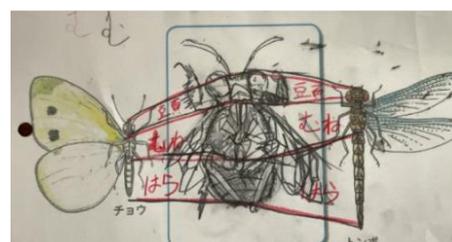


図 13：Y児のワークシート

【事例②M児：友達と一緒に】

導入当初、M児は調べたい昆虫を絞り込めずにいたが、シート上で友達の選択を参考にしながら「ハンミョウにしよう」と自己決定し、同じ昆虫を選んだ友達を誘って学び始めた。友達の隣に自分の席を移動し、図鑑の操作を見て真似をしながら観察を進めた。普段、一人での学習を進めることに不安感が強いM児は、授業中に教師を呼ぶことが多々ある。しかし本時は、同じ昆虫を調べる友達の隣で安心して学習に取り組み、教師を呼ぶ場面はほとんど見られなかった。終末には、観察した

昆虫の写真をロイロノートに提出し、他者の昆虫スケッチ（図14）に興味深そうに眺める姿も見られた。



図14：ロイロノート（提出箱）での共有の様子

他者の学び方を参照し、自らに適した学習形態を自己決定できたことが、M児にとっての「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の一助になったと考えられる。

## 4. 研究の結果と考察

本研究では、校務DXと授業改善の二層構造で研究を進めてきた。その結果得られた成果と考察を、教師と児童のそれぞれの変容に焦点を当てて整理する。また（3）では、11月に本校で行われたLDXS公開授業（別添資料）の参観者アンケートに基づき、成果と課題を分析する。

### （1）教師の変容

#### ① ツールの日常化と心理的ハードルの低下

校務におけるGoogle Chatやスプレッドシートの活用が日常化し、一日に何度もツールに触れる環境を整えたことで、教職員のICTリテラシーが自然と向上し、活用への心理的ハードルが大幅に低下した。これにより、多くの教職員が自らの授業や校務において新たな取り組みを自発的に進める姿が見られるようになった。推進役である筆者に対しても「スプレッドシートで〇〇ができるようにしたい、できるかな」といった具体的な相談が寄せられるようになり、校内全体で前向きに活用を進める機運が高まった。

#### ② 指導観の変容：「教える」から「学びを支える」姿勢へ

LDXS事業に関わる講演や、県・市の指導主事による指導を通じて「深い学び」や「個別最適な学びと協働的な学び」への理解を深めると同時に、校内での実践を積み重ねたことで、教師側の指導観に確かな変容が見られた。具体的には、教師が黒板の前に立って一方的に「教える」授業から、子供が主体となって「学ぶ」の授業への転換である。もちろん発達段階や教科・単元の内容によっては、教師による一斉指導が必要な場面も多々ある。しかし、日常的なツールの活用によって心理的ハードルが下がったことに加え、外部からの学びによる授業改善への意欲が相まって、学習の主導権を少しずつ子供に委ねようとする試みが校内で広がり始めた。理論的な学びを日々の校務や授業の実践に落とし込む中で得られた「できそう」という手応えが、一斉指導に頼りすぎない柔軟な指導スタイルへの転換を後押ししたと考えられる。

### （2）児童の変容

#### ① 自己選択による主体性の発揮

理科の実践で見られたように、学習する内容や形態・場所を児童が自ら選択できる環境は、主体的に学ぶ意欲を支える基盤となっている。この姿は他教科へも広がりつつある。算数の練習問題に取り組む際、計算が得意な児童は自席で集中して問題を進め、一方で苦手さを感じている児童は「先生と学ぶ」ことを選び、教卓付近の大机に問題集と筆記用具を持参して、教師と対話しながら解決の仕方を学ぶといった学習スタイルが日常的に見られるようになった。学習形態や場所を自ら決定するという「小さな自己決定」の積み重ねが、児童の当事者意識を高め、受動的な姿勢から意欲的に学習へ向かう姿勢へと転換させるきっかけになっていると考えられる。

## ②他者参照による思考の広がり

道徳や公開授業（国語・社会）の実践では、クラウド上で友達の考えをいつでも参照できることが、思考を広げる大きな助けとなった。直接の対話に気後れしてしまう児童であっても、スプレッドシート等を通じて、多様な意見に触れることで「自分と同じ考えだ」「そんな見方もあるのか」と納得し、自分の考えを更新する姿が見られた。「いつでも友達の知恵を借りることができる」というクラウド特有の環境が、児童の学びに向かう安心感を高め、一人一人の思考の深まりを後押ししている。また、これまでの記述が記録として残ることで、自身の考えの変容が可視化され、学習の終末における「自分自身の成長の自覚」を促すふりかえりにも有効である。

## (3) 公開授業における成果と課題

公開授業の実施にあたり、今年度本校では国語科と生活・社会科の2つの研究会を発足した。児童の発達段階に応じたタブレットの活用や、教科の特性を生かした授業づくりに取り組んできた。その成果として、国語科では『おもちゃの作り方をせつめいしよう』（第2学年）、社会科では『自動車をつくる工業』（第5学年）の授業を公開した<sup>3</sup>（図15・図16）。

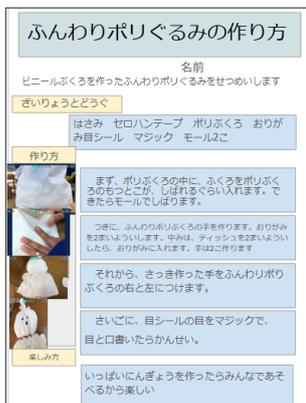


図15：おもちゃの作り方（国語）

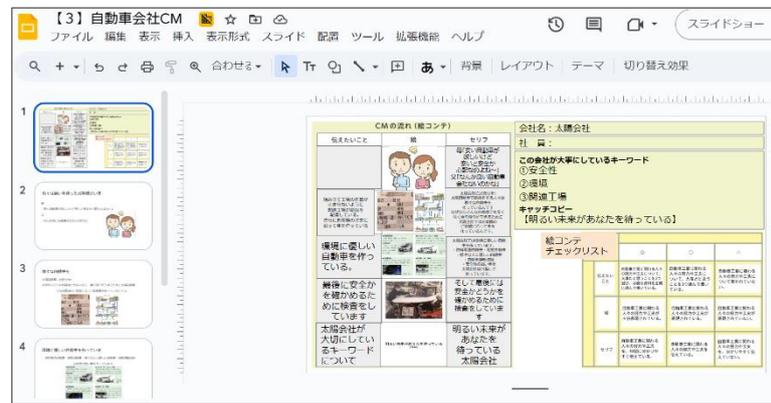


図16：自動車づくりのCM（社会）

参観者からは「スプレッドシートやスライドを小学生が使いこなしていることに驚いた」、「ICTが思考の妨げにならず、思考を広げるための文房具になっている」といった評価が得られた。児童がツールを駆使して文章の書き直し（推敲）や、同時共同編集を活用している姿が印象的に受け止められた。また、意見交流会では「デジタルにすることで文章量が増える、書く力が身についていると感じた」といった意見も出された。推敲や編集が容易に行えるデジタルの特性が児童の資質・能力の育成に大きく寄与している可能性が示されたといえる。

一方で、今後の授業づくりに向けた課題も明らかになった。クラウド上で他者参照を行う際の「タイミング」や「目的」、「見る視点」を明確にすることである。社会科の（自動車の）CMづくりでは、制作の途中で他グループのCM（スライド）を見る時間を設けたが、児童の中には参照する必要性を十分に感じられなかったり、何を参考にすべきか分からず戸惑ったりする姿も見られた。

## 5. 今後の課題と展望

<sup>3</sup> 2学年は流行病による学級閉鎖のため、11月26日の授業公開は中止となった。当日はこれまでの単元づくりや児童の様子について参観者と共有し、12月1日に全校研究授業として校内に公開した。

## (1) 今後の課題

第一に、「深い学び」のさらなる探究である。ICT を活用した実践を重ねる中で、どのような姿を「深い学び」と捉えるのか、その具体像を教員間で共有し続ける必要がある。単にツールを使う段階を超え、児童が問いを深め、価値を更新していく姿を丁寧に見取っていききたい。

第二に、協働的な学びにおける「他者参照」の質的向上である。本年度の実践で見えたように、参照を行う目的や視点をいかに明確に提示するかといった、教師の専門性を生かした単元・授業展開が求められる。児童が他者の考えを「ただ見る」だけでなく、自身の思考を更新していけるような「他者参照」の手立てを研究していく。

第三に、本年度培ってきた日常的な ICT 活用を継続することである。LDXS 事業の期間が終了しても、これまでの実践を本校の文化として定着させていきたい。そのためには、特定の教職員に依存せず、組織として活用を支え続ける環境や運営体制を検討することが不可欠である。

## (2) 今後の展望

本研究の次なるステップとして、生成 AI の積極的な利活用を視野に入れている。既に活用を進めている教員もいるが、校務において、学級通信や通知表の素案作成、会議録の要約、教材用グラフィックの生成などに AI を導入することは、教員の業務負担の大幅な削減を意味している。教員自身が「ICT を使って仕事が楽になった」という実感を強く持つことは、心理的なゆとりを生み、結果として児童と向き合う時間や教材研究の充実へと繋がるはずである。LDXS 事業で培ったクラウド活用という土壌の上に、生成 AI という新たなツールを普及させることで、学校全体の DX をさらに推進させていきたい。

## 参考文献

文部科学省. “リーディング DX スクール事業について”. リーディング DX スクール. 2023.4, <https://leadingdxschool.mext.go.jp/about/>, (参照 2025-4-1)

文部科学省. “【基本編②】「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の意義”. サポートマガジン『みるみる』. 2025.4, <https://mext-curriculum-gov.note.jp/n/nf934cb3fe36d>, (参照 2025-7-30)

奈須正裕/伏木久始 (2023). 「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を目指して」. 北大路書房